

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター

セ ン タ ー 通 信

第 7 号
2013. 4. 1

わが町を知らず

石川 巧

昭和二六年四月号の雑誌「月刊読売」

は、「いけぶくろ 告知版」なる特集を組んでおり、江戸川乱歩も短いコラムを寄せている。だが、この「月刊読売」は戦中・戦後にわたって大手新聞社から刊行された月刊誌であるにもかかわらず、読売新聞社にさえ全巻の揃いが存在せず、その全貌がいまだ明らかになっていない（注※）。そうした資料的価値があることを鑑みつつ、ここで記事の内容を紹介したいと思う。

巻頭に置かれた「わが交番に花さけど」というルポルタージュでは、西口交番・S巡査の目で池袋の夜と昼が追尾される。栄養失調の赤ん坊を抱きながらガード下に寝泊まりする女。「アタイの体はアタイで自由にするのだ」と啖呵をきる一五歳の娼婦。スリ、万引、かっぱらいが横行する雑踏。交番でオイオイ泣きだす酔っ払いの中年紳

士……といった具合である。

同様に「夜咲く一ばん星」(R)では、復興マーケットに紛れこんだ「夜の女」と警察のいたちごっこが描かれ、「売春等取締条例違反」で検挙した五十六名のうち九割までが性病罹患者の女給だったこと、連れ込み旅館の相場である一晩一五百円から二千円のうち、彼女たちの手に入るのがせいぜい二割に過ぎないことなどが紹介されている。

歓楽街としての側面が前景化されたあと、特集の後半では、所縁のある文人たちがそれぞれの池袋を語っている。その冒頭を飾るのは、通信省を退官後、この地に暮らしていた俳人・富安風生の「池袋風景」という詩である。

戦後新興の池袋は／街興る鉄骨高く
春光に／東口は／陽炎ひて広場まだ
整はねども／西口にはすでに堂々と

目 次

〈研究ノート〉

わが町を知らず

〈研究ノート〉

「新・山手樹一郎著作年譜」の製作にあたって

〈エッセイ〉

書庫とウイレヴァンと秘密基地あるいは片付かない日々

〈資料紹介〉

「劇 病中偶感」

〈編集後記〉

石川 巧

影山 亮

小林 実

落合 教 幸

／新装の駅割然と春空に／ネオン美々しきバス通りに引かへて／裏町は軒並飲み屋春の泥／二十余年前草庵をここに構へし頃は／夜となれば小田の蛙も聞こえしが

ここには、「小田の蛙」が鳴くのどかな土地に飲み屋が軒を連ねるようになったことに驚きつつも、その変化を積極的に受け止める文人の姿がある。ネオンの輝きには「戦後新興」の勢いが重ね合わされている。

また、池袋で吉川英治、徳川夢声、井伏鱒二などを株主とする映画館「人世坐」、「文芸坐」を経営し、のちにサンカ作家として名を馳せる三角寛も、「キジやたぬきの頃」というエッセイを寄せ、「池袋が東京の繁華街になる。この予想を私は四半世紀以前から立てていた。それには根津山の開放が条件

であった。根津山は大正十五年の春から、私が約十年も歩き回った一種の別世界であった。杉や桧木や雑木で山は暗く、中でも武蔵野名物の数丈に達した棒が三百本以上も生い繁って見事であった。キジもいたし山鳥もいたし、狸もいた。／この山が池袋駅の東口一帯を大部分占めていたので、池袋といえば西口に限られていた」と記している。「ぶくろよいとこ」と題する無署名コラムでは、

『池袋は腰が落ちつかない』と文化人は口を揃えておっしゃる。このカスバ的な盛り場の故かも知れないが、常連のお客は少いが、日本のシヤリアピン牧嗣人氏は焼ちゅうが御好き。西口駅付近の露店で大いに気焔をあげているかと思えば、高橋義孝先生もカストリ華やかなりし頃か

らのご常連だが、カストリが姿を消してからちよつと現れない。たゞ新田潤先生だけがよく現われてブク口魅力を満喫なさる。こゝのふんい

気を慕ってくる人は活動屋さんの方が多く、代表者は西口に現われる、佐野周二さん。母校立教に寄ると必ずマーケットを徘徊、唄を歌って『周二』の揮毫を飲み屋に残して行く。

藤田進さんは深酒をせず、おとなしく帰って行く。反対なのは、千秋実さん、酔うほどに議論を闘わし、赤くなつた顔をさらに赤くして喋りまくる。一度池袋見学に訪ずれた木村莊八先生は、さる飲み屋に飛びこんだまではよかつたが、江戸前マダムになんとなくタンカを切られ『池袋はコリゴリ』と退散した。

といった調子で、池袋に集う著名人たちの姿が活写されている。

ルポルタージュにせよ詩やエッセイにせよ、この時代の池袋に注がれる視線の先には、日々増幅していく歓楽街の活力がある。売春や犯罪がはびこる夜の世界とそこに棲息する人間たちのしたたかさを捉えるもの、何もない雑木林がまたたく間に変貌したことへの驚嘆、池袋をこよなく愛する文化人た

ちのゴシップなどなど、その内容は様々だが、いずれも行き着くところは人と物と金が明け透けに戯れる肉感的な世界である。

そんななか、「悪い街のよい大学」という異色のエッセイを寄せているのが立教大学教授・番匠谷英一である。やや長くなるが、いまとなつては貴重な証言ともいえるので、特に立教大学に言及した部分を引用してみよう。

ぼくは二十五年來こゝから一寸行った所に住んでいるが、知っている店といえば、喫茶の岸野と、時計屋の千野と、新本の大地屋と、古本の夏目ぐらゐのものだ。岸野のおやじに聞くと、昔はずつと向うの目白の大通りを歩く人影も見えたくらいで、そこを通る車のわだちの音も聞えたそうだ。／立教大学が築地からここへ移つて来たのは大正七、八年ごろだつたらうか。大きな棒杭が立てられてそれがくさつて、また立てられて、やつと何年かたつてぽつ／＼建築されたそうだが、立教大学のノンビリしたよさは、こんな所にも出ているから不思議だ。／長い間敷地のままで、第一師団の検閲が度々そこで行われたというから、ど

うもこれは事実らしい。昭和二十年四月十幾日だかの大空襲で、あたり一面火の海と化した時も、立教だけが完全に無事だつたのは、今もつて不思議のいたりだが、程へてひろびろとした茶褐色の焼野原の真中に、まるで大海中の孤島みたいに、立教をつつむ新緑がみず／＼しく萌え出した時の神秘的な壮観は今もつて忘れられない。(中略)立教大学が出来た時も、初め正門を目白の方へ向けて立てようとしたくらいだから、そのころの静寂ぶりは推して知るべしである。／池袋街がどんなに猥雑になつても、赤煉瓦に蔦のからんだ立

教園風景は、昔も今も変りはなく、鈴かけの木下道をそぞろ歩きする立教ボーイの顔は年々歳々に変つても、チャペルのパイプオルガンの音は常に清純なものへの憧れを深めてくれる。猥雑と清純、喧騒と静寂が毎日背中あわせに、その生活を営んでいるのも、いわばこの矛盾と撞着にみちた戦後日本の一様相だと思えば、ことさら不思議呼ばわりするにも当るまい。

池袋の街がどんなに騒がしくならうとも静寂さを失わない学園の空気。「大

海中の孤島」でノンビリ過ごす学生たち――。猥雑さを退け、「清純なものへの憧れ」を声高らかに語るこの言説は、繁華街のにぎわいを描くことで読者を煽情的な気分にするを狙うこの特集にあつて、どうみても浮いている。

下世話な読者に向けた下世話な特集であることをまったく考慮せず、大真面目に「悪い街のよい大学」を名乗るその行間からは、奇妙なユーモアさえ漂っている。高踏を貫こうとする誠実さが、逆におかしみを醸し出している。

こうして、「いけぶくろ。告知版」は様々な角度から池袋の光と闇を照らしていきわけだが、最後の最後に小さな縁取りに嵌め込まれるように顔をのぞかせるのが江戸川乱歩のコラムである。

池袋界わいは、昔からわれ／＼文士仲間や画家が雑居している。僕の家は戦災で焼けずただ一軒焼野原の中に残つた。こゝに住んでから、十五、六年になるが、戦時中、町会や隣組で働いた関係柄か、特に親しみ深い土地だ。／僕の家の前にある立教大学付近は、もとは実に閑静な処だったが、戦後の復興の波に乗つて、商家や飲み屋などが、ぐん／＼のし

てきて賑わって来たから僕にとって
は住みにくい処となった。学生の勉
学を思うと、どこか静かな処に移転
してはと思う程だ。しかしこれは無
理なことだろう。／いろいろ／な物資
は商家の店頭を飾り、物価は、中央

にくらべて安いので買いいい便利な
池袋になり、映画館も駅を中心に十
ばかりできたので、浅草に似てくる
よううで小浅草の観がする。／年、一、
二回仲間の会合で、二業地の料亭大
江戸に行くくらいでほかではのまな
い。だから池袋繁華街の空気は知ら
ない。銀座の帰りに駅前の三原堂で
お菓子を食べるにすぎない。

コラムの冒頭、戦時中の苦難を思い
起こした乱歩は、文士仲間や画家たち
との交友をふまえながら「特に親しみ
深い土地だ」と記す。だが、戦後の復
興とともに賑わいはじめた池袋につい
ては、苦々しさを込めて「住みにくい
処となった」と漏らす。そして、敢え
て偏屈さを気取るかのように、このコ
ラムに「わが町を知らず」というタイ
トルをつける。

戦後も池袋を立ち去ろうとせず、こ
の街を終の棲家にする事になる乱歩
は、なぜここで「わが町を知らず」な

どというへソ曲がりなコラムを書いた
のだろうか？ いったん「住みにくい
処となった」と書いておきながら、わ
ざわざ「池袋繁華街の空気は知らない」
としめくくる意図はどこにあったのだ
ろうか？

思うに、それは池袋というよりも、
池袋を呑み込んでしまった繁華街なる
ものへの訣別文だったのではないだろう
か。「わが町を知らず」とは、よく知ら
ないという謙遜ではなく、知りたくも
ないという拒絶なのではないだろうか。

ネオン煌めく繁華街では、人間の欲
望や情念があらさまに照らし出され
る。そこでは、誰もが自分という鎧を
脱ぎ捨てて他者の前に赤裸々な姿をさ
らけ出さざるをえない。群集のひとり
になって他者と癒着しなければならな
い。闇と幻影と虚偽をこよなく愛し、
変幻自在の窃視者であり続けようとし
た乱歩にとって、それは耐え難い空間
だったのではないだろうか。

こうして読者を興醒めさせた乱歩だ
が、コラムの最後では日頃から世話に
なっている三原堂の名をあげるなどし
て義理堅いところもみせている。銀座
の帰りにわざわざ立ち寄ると書き添え
るあたりにも、細やかな心遣いが感じ
られる。

余談だが、この特集には「飲み屋ダ
イジエスト」なるコーナーもあり、貧
乏庵（蕎麦・区役所前）、歌舞伎ソバ（映
画館前の小路）、小山コーヒー店（西
武鉄道池袋駅前）、フジ屋（飲み屋・
駅前マーケット）、松露（甘味・駅前）、
大野フトン店（西口バス通り）、おも

だか（飲み屋）、いろは寿司（西口バ
ス通り）が紹介されている。

注※ 拙著『雑誌「月刊読売」一解題と総目次』
として二〇一三年に刊行を予定している。ま
た、本稿で紹介した江戸川乱歩「わが町を
知らず」は全集等未収録、未確認資料である。

石川 巧（立教大学文学部教授）